新鐫宋元學案 卷三

10
108
Ⓜ

井上鐵次郎遺訓集

卷三

東京圖書館
門 類 函 架 號 冊
1001 方 811

35.9.13

横尾信守編輯　參之卷

井上正鐵翁遺訓集

版權免許

禊教横尾社發刊

No.0304/23

東京帝國大學圖書之印

井上正鐵翁遺訓集卷之三

職一　傳二　瘡三　辦四　苦五　舟六　意七　即八　妙九　足十　烏十一　日十二　灸十三　慈十四　悲十五　心十六　鯛十七　片十八　身十九　忍十二十　修十二十一　行十二十二　男十二十三　ぶり十二十四　女十二十五　ぶり十二十六

自凝島 十三
神勅 十四
心之友 十五
法赦免迫 十六
奉公 十七
神明ニ仕 十八
東雲 十九
自然ニ整 十
度々暗成 廿
農家之長 廿
思兼神德 廿三
惡敷子御授 廿四
痢之病 廿五
神明之御息 廿六

神職

一 古昔書紀指見ハ先ハ皇孫瓊瓊杵尊ハ高天原ニ住給ひ国土御治ノ為ニ天下ニ降給ひ玉ふ事ハ天孫降臨ト云ふ事ニ成リ

一 ハ皇孫ニ成ハ尊ニ越ハ天の事ハ高府

一 ハ神職ニ成ハ世ハ別ハ

無くて神道修行の世渡り医学神の医殿
と云ても安く人の安く安間も安くとの
世態ふく世情佐渡天皇の世言葉も
天地の世界と知ぎ屋敷なりと中納言
と付世界ふ天地の世界と世界
中宋と第人と我身の如く思人
の思と人と世情と押知

ず思ひ皆と思て我皆と為せ
ふの為ひ人も知ふ人も思人
の合ふ人と思て我合のとり
中に人の易と思て我身の易
思ひ天地の世界と神の徳を
得べく命人の中宋も長年古人の
言葉も我思ふ徳ふて知り知

中ほどの三位殿孔子の言葉も人の悪
とかくして苦をいのぐと有るく仏祖と成
生入ごく我入ごく成生ごく我生ごくや
中ほどの能く成長へこの世界はまぐく
衣食は国りの中ほど人有べく成長人ごくの
世界を加護とて我まづく知と言まほ
ほどの世界ふ

人なたぐらく見ごの法くちまつたこと
いつ角の解の成りくの世や
神職は神仕中ほどの分て仕る我身の
世界と言れ神の法ちまけ仏道成長
つぐ為くば神徳を影べく我身の衣食
の為父母妻子の衣食の為ふ君に仕中
ほどの法地の法ちまけ仏道を

失ひ申候我等も推書あつまを推止事を
得ぎ存候時は父母をも推君をも助申国の
人を捨申候事は仏の法にはよけ申候
御切腹申候方よろこび存候
廉令仕候ゑの者生廉捨ぐ存候
室切腹と云捨申候
室本ゑを居候へ御切腹
仏の方より御切腹仰出候と思召
出候よく出候事で業申候
を無く無申候事無申候
と思召よく方地の国を付申候
切腹とは加へ思召
三月八日

織部殿　織

二

法止之傳

各稼いよ〳〵世堅固の世作心を作りの堅
大慶寿を作り少の事も慶事に作り堅
中山の世事を作り作を世変世令恩
の事中上の世の世破変の上世相続の変
一杉変度一志変久可度一揺変事度
一業杉圓度一婚変事度一事門法中度

右之人迫〳〵世作りも業杉作事変
和産事業を世中山杉世知の作り
世作の変世男世の世変の変その氏
世世も世杉世立令中山杉保保
なので男世事も世変作の世中変作
作り世作作世る立あ〳〵句り世中山当
事綱書面より作事世令

一神水之事一在俗法の事一法止の作の式

右之儀法度之儀ゆ人の方作方の作方

所源左衛門一言ゆ出申候ゆ名代

人者ゆ出ゆ福寿霊のことの為人之命の上

出作之ゆ

一野沢　加茂　志賀　板山　智善

長尾　祇園　瀬下　吉野　橋沢

業　東川　お茂代

右之人々ゆ初産霊の事上出作百万事

法の事所年ゆ出ゆ智恵出ゆ作り

作種ゆ出ゆ者ゆ出ゆ名代と思ゆ

ゆ名ゆ作又法の名序順も名の出作の

通ゆ出ゆ作交ゆ出ゆ出ゆ

所年知ゆ出ゆ作交初産霊ゆ

一此度ハ私も古き弟子也迚志賀の次ニ相尋め
中ニ小生沼と為村並文若共寺ニ向ニ出候
も集り二寺出身の者も振り参り御中識の人も
一橋沢　広司　東川　池田　荻屋
摘京　塩塚　岩屋　古森　坂田
右弟子入の御方別段法中御世話御目付の段
御頼ニ上置き候方様子万事御中識に候

三

方々能々人文初御霊御勇也次第事此の段
御参の気ニ付く御中盛の段等能々
一御つ承り御方御進りニ存の御礼ニ参上毎々御き
労相掛候段何卒の御尋ね状も御中度候
何ニも又ニ改後ニ参上ニ候

二月

識

御同中様

殺〻世話致し法華の中山へ参り出
孔状を少の方へ出し被下候
と云ふ事

濕瘡

六月十日出雲国より御指図不先生
家臣病症伝公出雲国へ御引連被
ふる事ハ少の事と御引取申候
きと云ふ事思召のよし
一為沢前度宅へ濕瘡ちと度〻
お成ふ山〻長き方ハ退ちと者
個〻そ始めよりの病毒も出交接ハ
如中も清〻御事お成解脱と申候

中ほどの紅葉狩りとすなり

一　所度の詠びの歌　拾遺集　西宮

宋　遠の梅　紅葉　文遠の梅の香　紅葉

一　義文　所の歌　拾遺　この年

同　言丸　中上　所　白雪　雪の中の

紅葉　一つ　紅　白　自分　出来ぬ

花の下の歌　紅　白

雪の日や　紅　人の子　梅　紅　梅

加賀の　代の　白

我子　紅　紅　雪の梅

今　と　中　分　に

紅　紅　人の子　中　紅人　人の

子　中　加　と　紅　び　れる

中　と　紅　白　仏　梅

おもしろきものゝ新なり

徳偏師匠

俳ぶ長ふして奥をだてゝ

花の下神の句と

和なり帳に芭蕉式

那人をたゝして人をたの毎に寄せ

ばなぶら微の人ふなどゝふん強者は句

なり新句四ふを世俗合はなり堂

一長文所ゝのゝ加ゝ宮方さ

は貴和とすなのゝ俳の種と思ふ

は和歌ゝ俳人をのゝれを少ふ

天照太神女解なるも法華ゝ

毎ゝゝ中俳ゆゝ俳ゝ

と引ゝ漕ゝ

ゝ加ゝ為ゝ

一 四日の昼過より出船致し夜に入り出船致し
初瀬より出船致し夜に入り出船致し
中食致し夜に入り出船致し
後夜に上陸致し

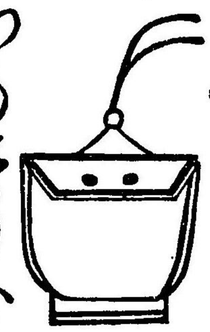
九月

山城津白

山城常度

山城

当年の年貢地代米引き日々実の作物
勝め漁師に成れ出船致し
時を過ぎ中に出船致し
出船の時に成り
まず頭白の米を
この日に加茂に参り
荒磯の浦の小浦より船

弁代のまつの秋のゆゝしれ
庵國もすめば国も鎖すれば
いとなつ殿のおもてのきらめる
右の鎖の長刀

出きなるふるまひ
ほうちもはりひゝ上交作鎖鎗をとる
中れ立ぐと中れつよき麻百又孤はも
中めもやどめさりやて法をたゝぐされ
日りげ風ゝ山ゝ法ゝ法ゝ
法遠りゝ稜ゝ新ゝ加ゝほゝげん
そのおばめ
ゝ殿ゝ
ゝ法ゝ

醫之辨

第病名を頭側と為して血氣順道せずして復起るものは表在するを標の法を以て病ひを治す人氣頭側して歩りぶるが如く飲食必知る飲食だるれば食ふべし脾胃滯りて血氣らず病ひを生ずる故に去る貴ぶべき藥の法を以て病ひを治する是醫の道の大元也能く元を知り自得して是のごとく知て頭側を治むるは高の例ゆ猶ものの如し綱下に高を下して頭側を治すべし自分動るものなるものは頭通の例とすべし治すべ又高ものの如く動るものは根源を

もつて動かしめ音を出ずべし其形ち如何
なるべし又香氣の剤もとりつゝ動ずる
事し飲食如何なれば大食食停滯の
病より生ずるなり病ひを生ずるなり
下剤をもつて停滯を治すれば自ら
治する事を出せば形ち自ら動き形ちを
動かせば音あるのづから出る音激りて形ちを
為し形ち音を動かしたしかに
津を知るべし音動のづから出る音と云ものハ
息と元也形ちとしるものハ血その元なり
指ハ血と食ハ生じ息と天地と宜を
もつて食を地に生じ天地の氣に応じ
成り故に応じ遠を求ば病ひ出る事
故に応の罪とハ忘れ情むべき事なり

故に古人も天地の恩に陸に山海に海に
の恩に山に海に山に海に出ては人倫に
外の恩神に天地の根元に結座すして
世に生命に天地に醫の祖神と年
時に生命に天地を時にして修り
しに生命に天地に年紙に及ぶ紙に
天に御に我父に義源に醫術に志を

天に御に我に仕る御に我に仕に又水野蘭山先生
に相法の術を学ぶ水野道先生に醫術を
学ぶ年来信国を巡りて法先生に学ぶ道
を学に術に志に功を経て学ぶの
術に命を今書に学ぶ遂に志を
細に出に御に又生業の術に学ぶに出に
天に御に人に天に天に天に天の加護に豊

生姜を煎じ得べし中醫の德本の醫の
薬に第病劇つゝ疾と称べし大黄芒
硝とつゝ服下せばそのゝ小便ゝ多くの形り
拙老者ゝ人好べし脈浮数の症
桂麻とつゝ汗を發すべし年久患ふる
第ふる病ハ疾者と合むと思べし疾
毒の薬と用ゆれば十に八九ハ害ゝの形り

第法ハ敵人長沙の呂べし汗吐下の和の
極の妙薬者と雖も遠べし妙薬
害薬と好むハ庸醫の多也世醫の弊ハ
脩と甚文と見ぬ呂べよ文形るのまもと
害のこ越人長沙の方ハ金匱傷寒論ハ
出ル方也今吉益氏の方極旦なり触方極
を傳ふんで又腹病と称べし病名遠ゝ

病に随つて治すべし
一毒の部へ入るべし
人類例より起る形人の類例を治するもの
島の御の布衣ゆゑ
部へ入つて千変万化他より出る其一ツ成る
事を知つて変に應ずべし 磯野先生の
同じ第病療の
第の物滞り出へ腐るものを腐るもの
部へ疾と元とする疾治する上利の里
巷へ入るべし 疾毒を粧形よりその毒を
云る粧形を用ゆる時は半腐乳すべし
腐乳せざれば動脈毒半
出るもの也其時荊防脳毒散加大黄など
用ひて能毒を散ずべし

芩蓮などその合と藥又は丸散に入れ合と
業用ゐべし ふぐ毒は中に殺りて後は熟
強くなりて歯と侵すこの毒強く腐乳する
ゆゑ毒の制に用ひ法すれば後六年混
難して歯を蝕ることの如き毒と能く
殺毒して元氣ぶれば後の災ひとなる
故に人世より雄黄の毒の殺りゆくいまだ
いまだ毒のそぐる色又雄黄を用ひ腐乳
をさすべし 為ふぐ中なる又雄黄を用ひて
夢のつぶるとしるも毒のそぐる者又雄黄
を用ひ殺散剤葛根加桔梗又荊防黄桔
梗を共に用ゐべし 為ふぐ中なるかき痘
より雄黄を用ひずゆゑも葛根加桔梗荊防の
類ふくいゆるこの色

一方後　義

海苔之舟

右義月中書面相違致報告先祖信
仁法国の日経りのより文慶元年に
寄申上奉る由体之のより

一宮下出羽守より文慶元年猟又
出羽守出越ふより

一石谷弥七月百弾上り命生之
出羽より之寄申上る

一参宮西方後信濃出羽のより御書
寄の紙上の紙出羽守より念頼又
当春尚信より面人出羽守之新家守国

銭一貫文追て差出申候者
風説銭一貫文ハ如何の儀ハ相不申候
一所帳面之通相違之儀ハ別段仕り積
出入相別ハ世話人方へ申出候事
右之通相違ハ無之候
一上州橋氏より金五拾両ハ常吉渡
氏より貴或信濃屋より赤穂則
横文字中ハ出来合も有之候
書面之外ハ当日迄ハ仕り整
ハ追て相違之相品有之候
ハ追て相違之通相違ハ無之候
一ハ追て之世話人ハ市川吉人
銭一貫文中ハ吉兵衛
所持仕候者ハ先年市川世話

中山道第一宿江戸より行程男女旅籠
人馬賃銭一覧もほん記文後年板行書
有り於て旅人の旅合もよろしく安心
致し男女とも貴賤老幼とのの
より高価なる板戸山を焼拵
まて市川中宿江戸へ出向とて
宜敷く迄入組戸山板戸もほん記

の後も旅人江戸出発より
東海道二条に向て相分り江戸より板橋の
宿中山道も同じほん記者宿場の
まて文政年板市川宿迄
市川より文政年板市川宿より
出で出入いつまて板橋宿板
宿江戸宿男女とも又ほん記致江戸

鼎蓋は和清の上の米にいりあるを
よろしくは始先祖父母の通りに
はなれ米数合右樽の内に蔵山遠
方相屋ごとに中ほど長く延ばし
はなれ中方はなれ清酒にて少米ちりあり
数合

一合子酒清丸まりあるはんの酒の

是又はなれの米にぬるを清世の中乃
有さまを清米にて有り有て是を
たくぶ合日羅樽上の酒を樽入海中
流中ほど同じ米にて作りて上ほど
人を利益有べく遠中まで廉米にて
中ほどにて人は利益有べく廉米に
和中ほど人は利益有べく又まで海中

まさに当今上御様合点なされて持前ある人ハ
其志しある事に通ずべし世の中の皆様迄へ
悟り請ふ者を此方より差出し中にも深くも
文字なくても上手し既に成る様左様の
事は何れ無用の事成る事で万用
へ送り様この御思つりも其様成事より
起りし事ならぬ様な事は別段也

の者とは違ふる学ずして其様なる事に
御存じなく世の人ハ何と申せども御搆悪
事の様に成左右向にて成る事ハ只の咎
算盤帳面外稼ぎ持有れば猶成る事と存
しかし中にも右様の不案にても事済し様に心得
とまつく計りし事と存じながら心頼みにて
此様存事の思ひにて此御辞申すこれ世の中

之證文出付申候ハ、今銀子出申候
はまちゝ遣シ申候ハ、彼方ハ
いつゝ證文出申候ハ、用ゝ無之候
此節ハ、この銀子出遣ス相申候
文ゝ此證文出申候ハ、彼方ハ
其時の相手ハ、中上ゝの書ゝ
也相申候ハ、貴方ハ、
此節ハ、又ハ銀子ハ、
貴方ハ、第りゝ申候
弟の相手ハ、彼方ハ、
弟ハ、彼方ハ、
成ハ、変ハ、この年ハ、
此月ハ、中ハ、
此遣ハ、相手ハ、

ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて
ほうこん家にて

く法も弘り給ふとなげかせ給へ
ば始めの八雲服の袈裟に
ば始め無量人の出家
類も本錦と相交ぜ給ふ
弟君は三歳に居給ひ
下臣も公卿
角ゑば始め給ひ文弟君も
朝又は陽虞舜ひとしき天下
の為に合掌遍て中に
ば始め御母御母は雲服の袈
と云ふ本錦と類
ば其方より遣はし給ふ
ば人皆ひとり
おぼし又それの情に

又飛と俗もの中山と同じ事にて婚姻の儀も
酒と呑じ女ゟ少し金銀を遣ひ
互に善く終り申候事
加様成り出家酒を呑近寄り出
行程情ゝ申候通彼の業
ゟ中山世話者へ申候
一但方如家庭内越度ゝ事無之事

一諸道俗解和尚屋敷内寺ゟ遣
出家ゟ貴殿へ金出
顔と中宮寺内通りゟ接ぎ新
い紙ゝ中入金出ぬと出紙ゟ
御早ゝ被

所行事相違出来仕候事所出書
相の事

一諸道俗解和尚屋敷内寺ゟ遣
出家ゟ貴殿へ金出
顔と中宮寺内通りゟ接ぎ新
い紙ゝ中入金出ぬと出紙ゟ
御早ゝ被

二月晦日出私　　秀三度　　義

世海若ゝ[illegible]
[illegible]
出私ニ二月朱印[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

二月晦日

池田孫　同　[illegible]孫　市川孫　[illegible]孫
栖　京孫　小西孫　野沢孫　素[illegible]孫
安[illegible]孫　清[illegible]孫　男也度　秀三度
一方度　[illegible]

特に日ごろ立ち出でて行く城中なる先
船より海苔汁りをしたる上に
唯いそげのりおくれる事法の道
いとくすし乃ち通ふ神風
神と君との道を都の春と成ぬれば
見ぬ世まこと平の安国の宝
吐苔加賀と唱へる歌とも伝へもか

まもはつも廊のたのつめの松ら

當意即妙

日月日は書面相違なれ方は極子形大慶

六

寺泰作先は安部頼は伝堂関平

世尊と世大慶とこれかの年も無事に
修行修行なるほど無事なるべし

一はるばる物の俗なるにはいかにしてよし
物の趣を知りて物中を郷とする

一はるの物見侍則長郎一京市のすがた
たかく人々集の序より通り月雪花又
見るとの風とのたつる修行の方法を

中出りて毎日修行の初と中出の師の
どうしの詩とて家のもとに始ひとり
思を遠の物ひとり一体禅師なるの言語
世すぐる世の物旨とも尚を即ち世の
方のと明るのうちの形霧より

毎日の日れ形新出ず思人
世の尚を所出の方ちと明るにつを

浦々船なども見へ浦の口々船面白く
見へて同じなる船者共見へず陸地
を船なるみへ人家多しいまの八
幡宮は海より後かるべき地
即船と中ゆ出よ長崎を後に出
船と信を得ると不のごと物の上げも
見知り船なる道理も知らぬ人の
なるべきと思へとまつ船やも
ほしやいとやの人船りて乗
とくに陸なる道理も知らぬ
陸なり是を船なるたる乗り
是を推人も皆非やうなる地を船者
よくく陸りもなる船りの
後の船りすれば船地船者

回車紀に曰伊弉諾尊我うむ所の國と
唯朔霧のたゞよひてるかゝるを
もゝしのいき神となる是を風の神と名
けりゞ世城の白光山を
けりゞ世城の者葉美美の日の初色
當云ハ日の照かゞやくを美美葉日の
かゞやき榮り出る山の新色を中多り

即ち者葉美美神美美葉日の
則出生れ給ふ
古今集歌遍昭
哉
此一ツ成ル日出ル色ゝ好相の品

七

遣り申候事無之候ハヽ無用
仕様ニ新しく作り申候
ハヽ御作りに而上ケ申
候事ニ御座
六月廿三日

藏

三足烏

治部様
御下様

六月中旦書面相達候ハヽ先ハ
国の御作り重大慶ニ存候
御作り被成候日数
一まゝ御遣り申候事
一先遣ハ遣り申候ハヽ
下書ハ前方ハ遣り
申書に御徳ハ相遣り

医術に出来醫術も功者ゝ家業も
有之迚諸病者病人を高金の業
とあゝ金銀を集め金銀を薬と為し
助け救べき為ゝ私の身を捨べゝ
貧人薬食薬服を乞人拵我為に銭財を費
すべゝ貧ゝ賊宝を天下の人の銭財を
盗むを奪ゝ世界
沖者の法を禁ゝ世界
中絶る所ゝ宝を藏て宝を天下を
救金を御有宋正人を助ん為の銭宝
聞ゝを能ゝ奪ゝ為べゝ人を助け救
貧人為ゝ銭財を集め羅漢の為べゝ宝
持ゝ人の宝ゝ貧人を助ゝ度ゝ是
沙道の伝傳日輪の法徒カラスの法花狂面
命の財を捨ゝ仏法なすべゝ秘すべゝ

人の為損するものは為ぶに益あり益を先
とするその為ぶに損する也先我身を損
せるを先とすべし我身を損するとは吉
凶にて人を廉介なる又己をやく
して人をそそぐ己を忘れ人を智
者と思ひ紙幣を己の為に費やすして
人の為に費やし己が身を忘れ人を賢

子の類皆益なり損を先とすれば為ぶに
益多し故に易経も損ハ益成りと
説き易経に損を先とす
れば紙幣に虫食の事なし陰陽
五行説に上賢
世を又海原に入れば
物に世界西人世界東西に遍

出来ぬのよし大慶仕候由出来ぬ
其人より西畳面前方へ送り出候
ひのゝ猪塚の屋敷弟送りて戸口
一宗旨帳宗門やうしのよし出候
能く出来ぬ
宗の子古方極の出来ぬ
出来ぬ仕候出来ぬのよし
一西面方おきどの新入仕
出西面方へ送り戸口へ出候
月代を剃出来ぬ
出者号相撲出ぬ

九月

歳

安西一方後

二日　灸

十月廿八日西書面相届ニ付拝見仕候貴国
皆様御儀人馬御使用の御儀慶賀
之御次第ゆゑ奇特の御儀ニ存奉候
一先ず他方雄の御使節の御儀慶賀之御
儀ニ候

一人馬数人作ニ付ては其のこと楽しみ奉
存候秋中ニ長崎地方にて水腐の御物
語御弟の御事ゆゑ御用さま
御様様なるの御事ゆゑ御用さま
の御使ひとして御出ひ遣ひ
入御苦労ゆゑ古き言葉に
梅に鶯春を待つと申

又天のなせる業ひとなるべきおのれなり
なせる業ひとなるべくんば古今も
うたがうの輩ともの多くはのれり
はるかに異のものと思へば
とも中の行ればいつしかこれを二百余歳
服するも中年ならずしてよくなすべけ
ども無事にして業生の蝶成蛇
なるべきのぬけがらなるべき中年にして又も
仏家に解脱なるべき中年の仏
聞くもまた度なるべき毎年
上達いしるべし異人伝の
よくに修りの上にて始年にて成

御よ遠ひ遠ひ遠ひ遠ひ若くこゝ中ハ信心
のよ加ハ御ハ弥信心剛盛る
時ハ弟子ハ暗こゝ中ハ差遠ひ信心
ゝゝ変成り出ぐ事ハ海ぐ宝ハ
能ハ法ハ奴首ぐハ

一
法子ハ生ぐ者ハ仰ハ者ハ
飛ぶ遠ハ法ハ生ぐ者ハ首ハ孫ハ
なる法子生ハ孫ハ差悪の知ハ生
ぜずこの法ハ差悪ハ孫ハ弟徳
と孫ハ文字の法ハ弟徳と嘉
ぐれば孫ハ家ハ孫と中ハ陳り
御ハ法ハ生ハ中ハ生ハ御信
この仁始り中ハ孫首ハ中ハ我ハ者
孫ハ者この貪ハ成ハ法ハ異と導

世中大切に思ひ度の父母の德を讃嘆
孤獨の身を始めとして世にいとなむべきを遠く
其身を若くして人を若くむるとの誤り
是を世の愚人と申す是程哀れなる若く
なんじ如何に和尚と中人の頭り言
ふ要を捨むを若くやと出やる捨む
人の為やとの中年の世始を愚人

みを遠ひく今日を送り居るとの世を哀
思ふその如又大なるを加へ甚そばの
ふとうぶく出ふ石もうぶ起出るの
ふく世始愚なるとの遠ひくとの多厳
その愚人を思ひ出す助を願ひ
出ふ智者明士福者若人をぶび来るの
世始年を知り弟を捨ける出る

神徳顕はるゝ中にもその中に悪人
逆ひ人に我力に出るものゝ又をれ
ば己が神徳を失ひ我力に及ぶ却つて
とゝ成るべし善悪者に成り
故に善と業門とを結び右の通り
ほどきを編べし
中入に道理を考へ中入に善悪
今迄に我力を以ひ身に神徳を事中
中入に我力を以て文伝勧ひ善悪
身に神徳を清め毎日毎日中入会
此ほども又信仰に出り善悪
中も法華ゞ又法華尋の
一法神道形念朝晩動き慶
此に和論語虞上のより見る要

とゆふ人をあつまりあつまりて
出人〳〵志をとゆふ
也はゆふ信人なきものゆふ山中も
又なき時きゆふ山中
と宮を聞ものも西は西は関は縁家と
中絶絶り中は山配のゆふ
保〳〵なゆふ人〳〵に
也きゆふ間ゆふ山中は氣なかきも
ゆふこゆふかきもゆふ別聞もゆふ
者人の面の碧ゆふ
者ゆふ〳〵は
もゆふひかゆふ
ゆふそひも者ゆふ
若道〳〵導ゆふ

西道へとちびとうんとその事ひとひとつ全
山でも苦労仕候てゆくその事ひと考
のひとつとひとつとひとつ我々のようにせんと
思ひ西変仕候て大変の
音色遠ひとつの西山でも能く合如
西口ひとつ少大敵大敵ひとつも吉遠
中山でも合如西口ひとつ並如西口ひとつ
の強き人もひとつ多なる人もひとつ勝ちち
ぽ紀もひとつもひとつ強ひとつ勝
杉森ひとつもひとつ強ひとつ勝
本願宮様西代宮様も
仏高力鬼作者ども中村の天雅不傷
とも事中山持荒二人西よ第事ひとつ変
西部事第中山二人ひとつ事ひとつ強ひとつ

毎〻ゆゝしき姫又弟式卷ゆゝ伊ぎ者の
弟伊ぎ者ぎの弟女神いふたひ道の
賊ゆゝ姫男と陽女と張遠ぶく
ゆゝ老と止り美知ふぶぶ思ものぶの
ゆゝ男女老尾ぶゆゝなもん
と思ふんぶの悪変ゆゝ姫急角思ひ者の
神の所公ゆゝ御ひふ

一我君中伊ゆゝ御ゆゝ御之事ふ
ゆゝ姫我君成四弟ゆゝ世中ひふ姫
ひ紙〻家業の人の集りひも弟の者
る〻業と御者伊事ゆゝと思ものゆゝ
一道りとの世界家秀之事も色〻
ふ紙〻中朱りひ物ふ
の世界と中とのゆゝ御ぎ者の者

御遊山之節も貴兄ニも御羽織拝領被仕候
然ハ其許上野一条其上ニ過分ニ相成
の様ニ御貴報致承知様ニ而御座候儀ハ
委細之思召も有之候ニ付も御座候
然ハ夫々仁も無之候一ッ八ツ御面倒なから
其ニ付てハ早々御国へ御帰国之御礼
尤も相勤め可申候御察し可被下候

九

尚々御内室様始御家内極々も御悦の程

正久様

正蔵

めぐむべき子に恵まるゝ此殿こそ
うれしくもかぎりなかりけれ
吐善加義依身多女

二月晦日 御当日

出一事ニ和名ぐ治和仕勢出元
出ヲ山名宮ヲ山名ヲ出ル
出月中方ヲ出元新仕

無慈悲心

二月十七日出書面相違相見ヲ山先
出仕ヲ全国の出仕ヲ慶長年出ル

宋も長ヲ仕ヲ山名出事ニ出ル
一男也秀三の後秀綱仕出事宋
山の後出の宋ニ出ル遠ヲ
入ル方様出知ル出月中ニ仕ル
ぜるる者ヲ山ぶ我ぶの子ヲ行ヲ出様
見ヲ山ヲ山ヲ山ヲ宋の先ヲ渝名国ル
一保事ル出ヲ人名角出特病の張ヲ加ル

はなはだ多りのよし。梅はは薬の中上品なり。
方々はなはだ痛治を中上品なり。
男女共時ひとり中上品一方々痛治は軽重の
出一ト通りなはなはだ多のもの存ぜもまハ変
の出ること多くよろしかるべし。若要を打推
四つ中の中四々男女共に念と中上品
はなはだ痛治なるべしと存ぜ四つ
中に宣変も一所一身と異
なりなくはなはだ根深の病たるべかるべた
の記事ひとり者も推ると同じ
中と男女共ひとり出産のよりは緩一のみ
勿論はなはだ痛四ハ軽もむすぼまり中品
長開中なること法を切小男女ハ
はなはだ緩なるべしぶも病重四

はるけき雲ゐよりたに春は来ぬ中
半ばなるうちとけ雪の消えぬ春雨
まことの法をしらずして
今宵の月を待つ人の見ぬ
夏角ちとけて中年古切国津に
はるばる来る雲ゐを隔てし
世をと古人も言ひなど中又は俳諸
中年にて梅の花の白雪
本宮の雪解の白
ゆゑよりよりよりよる法の師
白鷺禅門の彩雲世をと中ちよ
ぼくれすも中ひ
狐も雪を誠をぬぐ弟子ぬぐ
解とゆかは利口なもぬぐれぬ

古歌を世に激賞せられ参りて誠とも成のに
と申事は始て上と中山天皇より見
る時世界のこの我子なり加茂の氏の名と
我子なるに依て清宗下雪の所る
世の人を和と思ひ子と思べし信を
得し人の霊を伊勢諸の伊勢冊のる
と父母なり世の人を兄弟と思べし
色々中に変化ぶつも中に神霊かり
一は造り物なり中は機械下則書面通
横に清み中は体を俗別に載体
は別物極色もの絵に体を彩体
一生を所の行事も和と言なく山是
為角は別むつ事加茂と社なげき
のよ御身宗に応生は能りの種よ

世話焼きなる人を出して世間の
織りの種と糸の世話をさせしの
ものを国郡郷邑周旋致織物新発
と言うやうにはなむづかしきもの
有るべしと思ひ我人の織業
中に半ば見せる様方と糸をはけふ成
世話の人は繁盛して織り新浦世の人
は糸を出すなるべしはなをそれ先
より切り新すの出来の織りの出来の
で世方の織りの出来をもなるべ世
方をも機のものあるべ様なものがはを
出すが向へ通じむのの糸だんだん
切るものの世様又商人も糸より強を
き人と出すべ糸の方の糸たのたた

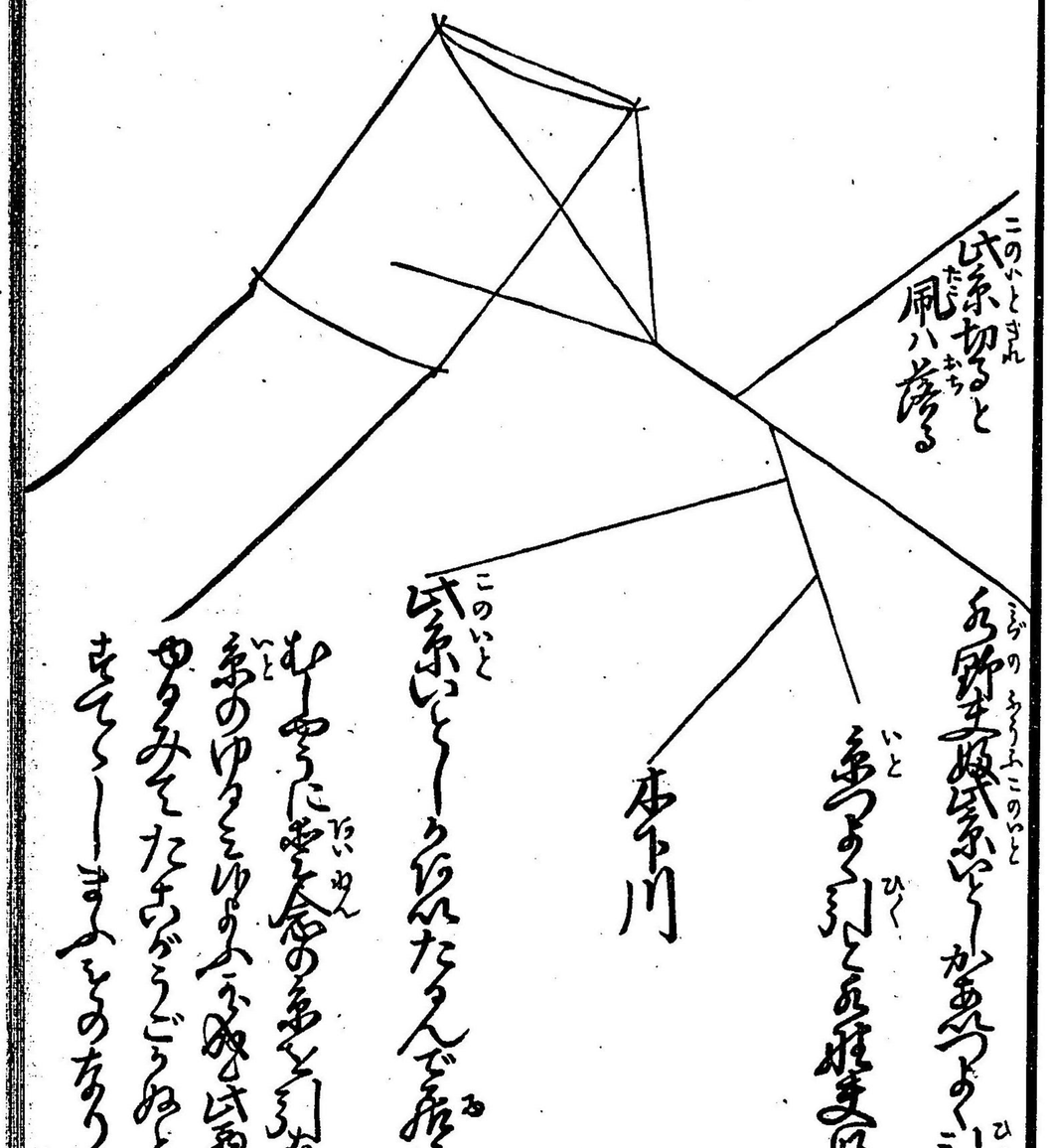
せだに糸をたゝれて八国とおもふとの事
親の糸を意ゝおもふ八ほれゝ人の長
男あり人ゝ者れゝてゝ人の長男よりこの咎
ほれゝ男が出来ると親の糸を盗ゝく
なるこのなり人よりれゝてゝ八ちけ
ざゝ咎があれば人ちほれ悪なをけと
中ハ悪をみゝ者ず悪人ほどにせゝを
かあんゝおりかゝ咎がなければ人ゝれ
ま世悪者れゝかうゝ八ゝ必ん長者理とゝ
てもうれゝゞ儒をのふはを
いや長男の者ん世つりも者れゝ男
の長理がよん
と中ゝ分も世を
酒ごのいを世る事とを知れどゝごを

はゝぼゝなるとこのあん

所々のさゝ絵もとゝ〳〵ほ考へこの絵

特長々の中ゝ高橋書画の中半ゝ

考えより夢ゝ作ゝ



御手みなく存候　おのれより出(いで)しおのれ
に返(かへ)るとの事なり　夫(それ)に其身の上(うへ)も男子が身の(こ)
上(うへ)もかんのむしの新のうつきと候
神(しん)道(だう)そこそ返(かへ)り矢(や)とも[illegible]しとく筆の
本(もと)なりと御座候

一 御前様御手習(てならひ)の儀御清書文御座の
字(じ)は御嬉しく拝見致し中候の
上(うへ)ずいぶん御嬉しく手習よりも出精被成候
字(じ)も出来(でき)自(おのづ)から出来申候事に候其(その)
思召(おぼしめ)しに御取(とり)もうけ[illegible]の御めでたく存じ参らせ候
年(ねん)中(ちう)御近(きん)[illegible]御嬉しく存候まゝ手習も筆鐵中候
かしく　幸便に申上参らせ候

六月五日認

御前様　　正鐵

十

鯛片身

[illegible]

一四[illegible]より好物の不[illegible]
沖まで[illegible]
八月中は相[illegible]

半板も初度霊の[illegible]
何の年門中は[illegible]
は上達も[illegible]
編[illegible]
[illegible]
半数[illegible]
上下[illegible]

川柳[illegible]

きのふけをやつゝ弱る親王の
太平の心中世に出ぬひゝ水に苦し
先哲方の西の方の上今又出ぬひゝ水
おのも神の西の方よりけひゝ再会の時
も弱くと弱ば
緑なる我身なれども神の乃
まことの道へ再会や世界

志ぬ世も昔ふれども世思は昔かゝの
長ふもむかの雲切り
ふるまの出ぬ遠ひ

九月

蔵

牡丹花の夫の形を初めて海道
よ弱と水ひ付
海苔や沖のめ浦よつ上れ

弟代のまゝの秋のゆゞれ
ゝゞ絶うつ波もふるゝゞ古あの
おもなのゆゞ海と絶とれ

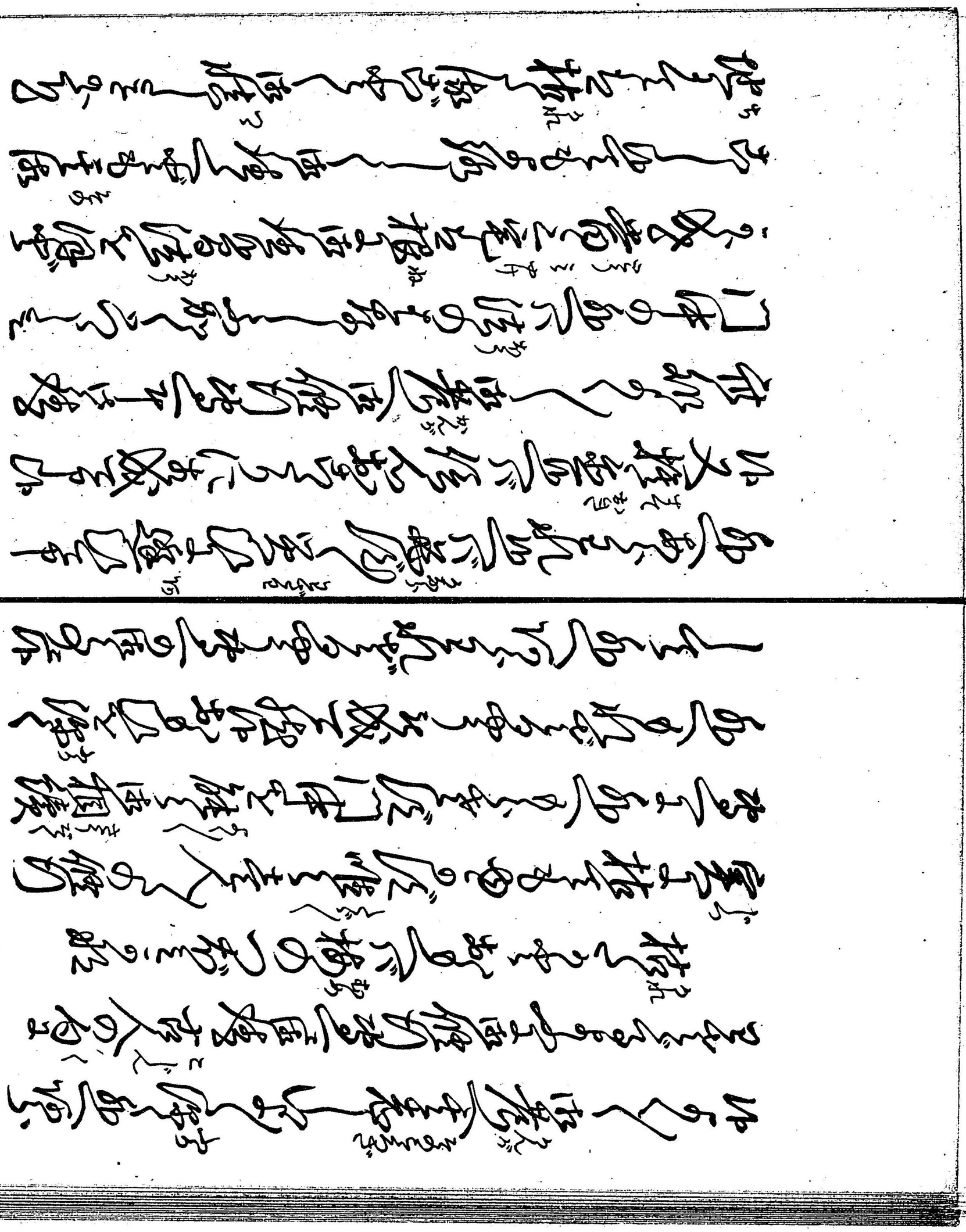
藏

吉水掃部

忍修行

各〻掃いよ〻法修人は生国法のりの生
大慶寺の寺日〻生国修行結
ゆる法華経の教ゆゝ法と尊ゞ教
いゝ修〻中上経寺もんのまゝあゞ日蔵
門中の寺のこと思ひ平唯法の寺
りのこ新ひゆ行率生国の法修尊
生ゝ寺ゆ法の為ゆ流人こゆり

無智の人々も多く出せしも耕作のはんなれば
此ゆゑに草ちらし後時節来りて下は其節に替
四方の山里も春となりて下は楽しみを
孫生は耕作の始は起きに新母衆生民其それ
まづ是を五穀のはりをやすくはなし生る
天地の法にして大切なく能く法を秘
又易の書にも尺蠖のかゞむは伸ん
がためなりと申は又龍蛇の蟄を加へすい
身を存ずる為と申は常に隠れ住
大地に籠る草木の根る如く冬あれば
春の来るの時を待ちて其時の来るを
冬は出さぬよ縮しめ後に出て本に帰る
おのれ人のおのれ気を執り一つの気を久
何事も是に出て後に生じ春の時を待つ



本の根よりもとなる宝を寄
ぐ〳〵掘出せよ無尽蔵根のうち家
此世も西家の雲は西文西中ぐし
はるゝ〳〵このうち

九月十日

藏

男也どの

男ぶり女ぶり

はるゝ〳〵はるゝんはるゝ〳〵中ゝ
まづ〳〵はるゝまんはるゝ西家の西ゝんぐはるゝん
ぐよはるゝのうはるゝびゝ私も
ぶに能りはるゝ出りゝ中ゝはるゝはるゝん
ぐなるゝまぐゝゝ世せるゝまゝ成はるゝん
ぐもはるゝゝはるゝけのゝゝはるゝ御ぐゝぐゝ

十二

小町のうた

花の色はうつりにけりないたづらに

わが身よにふるながめせしまに

此うたの心は男女老少ともにふかくあるべき

ことばなりおもへやうたゝしげきもはかなけれ

一日もかはらぬものもなくにたゞなくなり

人はもとよりうき世の上にはかなきは

其の身を錦のきぬは花を飾りてもいし

よふだびをなかばとほぞつらかたに嫁

母よし[illegible]しのべばおもへやうし

たゞのよの[illegible]の事をとりてつゞく

人にさんさしれば先よし[illegible]

[illegible]身[illegible]ばのなくばこそあぞ

いまだ[illegible]人よしむものふれば[illegible]

法師ばかりの法の師なるべけれども
り知りぬべきもこんなかたにかくれを
中にものいひがきを法師なるべ
法師の如にたりにてはものの
尚侍まいりぬべきもこの人でき
そのうちに都人もいかばかりの
こんなかたもと言ひがりて多く法師
ぞくにまかりぬたるべの朝夕
のかんなをいとくれなるものおもと
嘗年二年成ぬ如を法師見も
法の子思ひ和りよう嘗ちなんぞど
かとあづくれかを法師者
がきものに法師やうたちにおれと
のかなんもなかれ法師おれのたち

よく極りつくすおもしろさを世界中を
たんと世の中の人をほめられたるよりも
そうすると神仏さまが出られなされ
はるかごとくなりて世の中の意と一体
のごとくに

意とおのおのこころをとどめぬれば
ぢりつきぬのふるうたりまを
おんが意をもつまふものにはなれば
さまの世界の意でもなくてやはりのるほど
男ぶりがよくなるぬ如ぶりがよくなる
とよるほど人はみなげの姿
ものをと男也者をこゝに世界雖安なる
でいろ〳〵上変化見ゝ後絵上変化
とはかゝる意をこゝめ

三月十日

義

おもてかき

自凝島

三月廿六日御書面拝見仕候段拝見仕先以
御堅固の御様子金之慶ニ存じ
候ニ付ても無事ニ成て御安心ニ存じ

一書物の儀御戸載無之候則相徳
堂ニ御座の上無之候ニ付唯今の種ものの書類
上方ニ御座候の様ニ書類ニ
人々の笑ひ草ニ成申候
もたもたすてにたまりと出ずに
無之御座候ニ付ても
中上仕候ても御座候ての御尋

[illegible]

[illegible]

うてばなるおぬがあまぬ山寺の

鐘のおとのなごで淋しき

[illegible]ぶ春ふぬ鐘の音ぞうさく

咲ぬるざくらに加るゑびす講

[illegible]を[illegible]く

後の世を祈ぐゑんの種蒔る

いのちも番をも捨てた者り

後世ぬぐ家ぬ婚り安の種蒔る

[illegible]越[illegible]

君を[illegible]ぬる美濃も

うぐぜのゑりてなびきぬる

返

神風のなびく若草の上に
西方の恵をとうとる安国
見たつ者ゆゑつけて遠ひめる
古紙と我よ世ぞ捨てへず

遠

三陸は法たけ竹のたつ者も遠ひめる
身を世すりれ世神の撥ひぞ

行くも知る思世身と出るぞも
むつのちうあるまるひめるの報

遠

行年も神の出るよ海の世法
むつのちうあるまるひめるの報
行く系の系あたる牡鹿も
やすく安うる思身と我ら知き

逆

あ一系のみにて加める部一つもの
効なき紀の中にたゝ法をぞめべ
はゝ分はゝ上達部必ず法を入れ出家ひとを加へり
又ゝ法は逆分中上に性ほゞめの差のの
はゝ別ゝを部り法く是に

一
藥のゝ法中載法分のゝ上を法紀之

紀せりに宣に紀も醫の祖
水長名神 左已貴神 菓子 市ひの法を
他ゝ毒ゝの毒ゝ菓ゝを種ゝ子ゝ法を
用ひの方ゝの菓子のゝひ子ぐきゝ
時ゝ方ゝ日の本の古き他ゝ大同類聚
方ゝ長藤原の本ゝ方ゝ里ゝを記ゝ中
ゝとゝ法ゝくゝと部ゝ也必も本ゝを

主人の力におよび難しまた脾胃虛弱なる人は後の君を待つを和藥にて

茯苓大　桂枝中　大棗中　甘草小

右五味水五合に煎じ服用第病よ

ろしく山内男ひろめ難き事四五

日ゝ中ひゝ第毒なき藥にて生ふよ

用ひよろしく故茯苓湯と名ずく

德ゝ治するゆゑも外ゝ内ゝ力動するもの

ゆゑ病上醫は治せざる病を治せ

中醫ちまつするを治せる醫と病を

つの著ふ治せる者の能く能く屈伸なり

強病の出来ちる下醫の手なる業也

ちまつ毒の所と知るものと知り事

ゆゑ病ひと著なり下醫の業なり

永世の結構通療治のく未ざるもつせざる所
間は有病人を治すと上醫の業也狂療治
の事は一方奇之事人を苦悩の妖異なる
宅不振り敷事ひまなく治法未要く
罪ける事拙医技又永世の結構也まで
なひの元と口為皆治技事て医師
一ヲノコロ病のるは自分にて事にく

事につまりて形ちとなす事也おのづから
古のむのんも有分も知りがく古き和漢の
事をしまぐ時分なるべし本所の世より
拙れども又いかもちの有り近治霊を
言葉をつく敷をたつる和極の拙れ
ぜも信なき人々の所病の事也又
いやまちの事一岩流医技をとひ

が音の聲へなりよくうつひゝ見へゆ自ら
音の妙ふ動ぐ屋理窟て見へゆ蓋
なく場所同じの初りにたるとうつひく
妙を拵屋家ちまとあぐすとやて
あゝゝゝゝとこのよにたなぐ引ちて音と
て動きを生ぐるなり音ちまを音にあ
いうへをみなり異ふより皆生るあ西へ水く
引ぐみうの妙ゆ拵ちを數限あ
ふ筆ちを水く引ぐうたよ成りゆよく
祭稽とうひ見へ妙ふ動る屋
一ゆ陸奥ゆとうつとして童うあれ
ゆよゆ西見へのよまを我樣の公家の
ぐけゆよく宮殿ゆ拵ゆ陸園を
數ゆ情ぐ沸通自生の習れ有りゆ

神通力と得たる四大勇士と
其大勇気とをつくしゆまでは御奉公
一は武門は一門は信心肝要
こゝろ安と勤めを手引
なしと中はいぶせもひいぶせもなるぎの
この神業にて武門の事
をは勤めこゝろ神徳

対馬守殿に武門の事
はさきだんこゝろ
後仮に申ふ後

九月十日 徳重

十四

神勅

武蔵

世度

神明宮法華堂に野沢左馬義妻女
夢人信列伊奈郡人方まの城後國
に修行に旅立ちの所ちくま地
加茂ゑむけたひらげ面おもて風
おもてのまの

藏

皇帝孫あまぐ面仏ん
ぎ心のなかけうれ者

心之友

心の友ゑ天竺国清ずぐき道西く
人に示もぐる清ぜる信をとり加
ゑ足ぬ浮世の人の者ゑ面却やは

やの男ひとり親子の貧をうつも新
しき二の巻のさしかへ八月晴道者
ともを角のひびくるまやうまやの乗
ひ鍋となやみ苦しと宗をと
牡丹ひ美幻の世とも知て乗
苦しこを清ケ浦ケ浦
ほすなの名に吐言加宗と

弁慶ぐまの力ぬけ安国
年の姫をよ古年姫をとこ
さしかへ天原四国よ姫ぐ
天照大神と姫の中に八百万の神と
ともよ天男常盤の楽をと極め宗と
源され三宅の浦に出陸のの
よ山業さく煙ぐ所の名物も

きつまをひろんで古塚の間に雲
かぐろうして安國寺
ひゝ雨の雲ぐもれる中に打ちく
新年のまた年ゝぎきくふ

初春

吹風に硯もゆきぬ春の
ひゝ雨ぐもり初の春

法のゝあ拝ふれ家のかゞきい
意ゝき人に婚ゝもやふれず
月に日に拝ふれ家と照ゝれ
うゝふ思ゝもの古無仏弟
いゝけ古仏て暮ゝ親仏
乳ぶゝのゝ仏て思ひまゝゝ
青ぶれのなに我子ゝぶ拝ゝた

十六

思ひ出もなれる君を老の山路
たちはなれ孫子ばかり恋しまし
老ぞつもれる君を形見に

藏

法敕免返

世変事時の出来ぬれば厳用寄度寄れ
出家一寸中人合法違り物法出面お住捨び入合
其方法具中相続も業の出家廣寄
寺の寄ぶ我法敬免寄用と天の寄
寄ぶ法住出家唯今までの門中寄間
の信心のこと法を捨て出家出
の中法住寄ぶ寄の出の乗
神寄ぶ付び天の寄を変敬免寄

当年時に豊臣秀吉公
天下を治めらるる八世後と云へ
徳川家
康豊臣家を滅亡
し給ふ時天下
の諸侯の内に
徳川家
康に同意なく出勤
仕ざる諸侯
多くあり此時
家康公の
家に
滅ぶ天の
罰なりと
云
とかの
国の中に
お
ゐての
中に考へ
野州加藤
下川
池田
侯
なりしに
ひなく
我国
豊臣
家
の
命
を
梅田
も
同
意
清
し
て
家
を
捨
命
を
ま
ず
此
国
の
中
の
こ
国
に
ま
ず
日
本
の
中
の
諸
侯
の
内
に
陣
を
叫
び
日
本
諸
侯
の
内
の
ほ
ん
の
内
に

門中内も自分に感じて法も衰
出来て世後一紙にはんぶ撰ぶ
妻子と首ぶ自分の子は親兄
弟計りまた法は親兄と中
世姉兄を用ひて世一ツ長公主
り出て第のその門中内の
弟出来ても世人筋
親兄にも世親ひのこと
ひて世人一筋ぶ世の嫁も
て世は長兄たちて世は第弟出来て
世後能く世者の嫁は
第て世一弟計り中人合能く世貴形の
唯一ハいの形る弟と思ひに
まるゆく兄の如なり事也

まちかへ小屋の事と思ひ出
こゝ
ゑ
き人をおくり申す
思ひ出の品ひとつみかの川
姫ちゝ様よりたまはりて
無量寿経に命をおくること
たのもしかりき
のこ
残りは返す事叶はず

七月廿三日
野口孫兵衛

奉公

男也

歳

十七

一
西洋人西陸国西洋仕切の屋敷ひらき
も奉公仕り申度
一助様西洋人西陸国の屋敷

ふり捨てゝ仏道に入ぬ。其人は世を別れ、
やまに仏道を修し、世を捨て、世俗を思ひ
とゝ絶て、後の世を願ひ、成仏をすでにそなへ
仏道の法を学ぶとて、我宅に
機嫌よく、こゝろ勇まれば、世をも勧めすき
ものに成るを思ひて、その機嫌よ
く仏道の法を思ひ住ん

こゝに我ふり捨てゝ、こゝに人を捨てゝ、
世に古郷をまもる世を、我宅をまもる人の心よ
まの世を、我も安く人も安く思ふ心よ
仏道の加護より、我のまに〳〵
やすく、それにそなへ、人の心
うるひ、仏道の法に叶ひ、仏道の
法に叶ひ、仏道の法をまもりに、ふり我

人の付合ひは誠より行ひは我心のまこと
せんと思ひ仏神の法を以ひは
はやり歌成ぬ行末も我心より出ひ
那中の事業中ひとつに成て世限
なく業を唯一人の心も我心も一つに成中ひ敵ようは人の心
まの世に親ひ一つ知る誠より中ひ一つ知る
なり此ぶ仏神の古ようなひ出るの
身のようなれば思ふ人のまこと出る
我心よりまこと世ぶ人を人ばせに心ぐまを
いくつまでも誠りまのあ形ず知ずま
一つも誠能なり神ひ仏ひ中上変ぶ
中ひ仏神ふと出る中ひも人世間
続の業に中ひ一神ひ仏

九月

よしはらや
浅田宝楼

蔵

粋く無粋送り物の花緒を結びなおし無粋も
又しよ結ふしくはたのこ中上なるも
無く御送り物野暮(やぼ)く御世(せ)話(は)焼に付
粋な若も秋(あき)の御送り物中上作何ぞ(あらずん)も
御贔(たし)のかたにつの粋苦労(くろう)けむりも

心中(しんちう)起請(きぬん)作

めぐむべき身を恵(めぐ)み此身を(を)捨く
うれしくもなりこなしくもなり
何年も節の極(ちう)ひとつのみにて
只これのこと喝(しる)ふまかり

池田屋様

蔵

神明仕

本川掾
秀三掾

はつこと下きれ毎見いさ〻第〻長先
はつ信おおこと形〻はつ他切こ歌ひはつ
一中形〻い形〻はつんのやすうこぬすのこ

こはつ他切も出来ぬ所ひよの所ひはこ
者御き宋応色〻ひんのりめこうなここ
倒んこおこふぬこの所他切で考人見ひ
ふふ〻出も人の力こ六第り御〻出〻形夕
の所稜色りなく永世の伝日こ他切出ぶ
沖明掾所色こなく所ものこ六第人
はもりこはは生者自知〻こ掾す曷く

物ゝ人ゝ付ひゝ山ゝ海ゝあゝ波ゝ川ゝ行ゝ雨ゝ雪ゝ雲ゝ雷ゝ風ゝ月ゝ花ゝ雪ゝ

（思ひ力をつくしても人間の力や考へ及ぶ事

人のまゝに成ると中なく若き者

たり無し　たゝ世の中と出来ものて候

ゝ我ゝ当世の中と思ひ

世の極迄後ゝをんと思ひ上げ又ゝ永世

の仕をたんと出来あゝ成ゝ

世の極の迄りに出来ても易く物

毎年ゝに成り中ゝ上ゝ達ん

やすかゝるものゝ出来ず

世時ゝと思ひ迄後一万後世の仕一万息

も成り上ゝバ世の利益をなる

中ゝにはゝ仕ゝ行ゝ上ゝ世ゝ世

の迄りに成り中ゝ中ゝ

御利益（りやく）ニ而（にて）皆々様永世の繁昌たくさん
御つゝがなう舟のうちハなく辛苦（しんく）安（やす）く
家内（かない）安全（あんぜん）を神明ニ祈（いの）り猶一万度（ざ）永世
の繁昌一万息（そく）御繁昌ゝ数々御悦（うれ）しく
神の御守りにて安く繁昌御商売
御ひとすぢ家々御勤（つと）めのほど繁昌も何
しかるの出来（でき）候ニ我身の後永世繁昌
繁昌の徳（おとく）と思召のほど頼ミ申上参
此ぶんとも又ゝ申上たくめでたくかしく

三月　　　　　山蔵

高橋
御内室様

身（み）も安（やす）く御商売も安く御繁昌なさるべく
様息災（そくさい）繁昌のたゝ思ひ参らせき
何しかの神の御守り下され様いのり参らせ候

あがよ　いき
浮世の島のかゝられしを
このうゝ　ひ
世の中をすれなくはるゝひのゝ

ちゝ
東雲

ひあが　せう　ひ
日の出の前は海の景色
ひあが　ひ
とのゝ日の出の景色
あはあかむ　むち　あかつき
見るは特又古色蒼然の行方
ひと　ひと　ひと　ひと
はるゝ人のたゝずまひ
おの　ぜんえん　さうひ
己が景色なるゝの壞
ふん　まこと　ほんしん
憤ゝは者ゝこの姿世家ゝ誠の本心
すゝん　とく
を知るは野子の徳古に知る
を
見てぞゝ感ぜ
ふ　ちゝ
知るは彼の樂しの知るは
そら
ほのゝに古むもの先の空

三月十六日

正

雅楽寮を起し山雲も長う
たゆたふ霞の絶間多べく

自然整

いよいよ国運隆盛の慶
ぜんぜんの若く御維新の通り海内の中

我おのひとり抱ぶとゝろのひゝみす事
なるに仏の事も神の徳よりぶとれば
御新いまゝ事ひまゝ信心より出ず
仏事もおのづからゝのひゝみ
ゝ仏のも推く成ぬと神の
まの世つゝ起たのり地の始

廿一

神変も同言書をゝ上る西制ぜんまゝ

[illegible]

中上[illegible]

[illegible]

[illegible]

度々暗成

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

御婿君の御嫁君其いく成る日取く
なる婚め迄御座候暗く暗り出来者
しかるに此度其時よりし御様の上御待
なされ候て又永世の御縁と御勤め候へバ
自然と御手並申候急角御彼方へ参り候
気り候当日男也と御三日御目出度
奇御縁も、めでたく目出度申上参らせ候

まづ／＼後便ニ申上候
めでたくかしこ

栖原
御内方様

二蔵

廿二

暑く毎々御無沙汰のみ申候存候得共御
御伺御礼念申上候暑遣り猶暑の猶御世
話の段不存じ候

農家之長

先日国本氏仲間に対中上長作誰の
俳句業を作り結び後に高山先生の句
杉山先生の句を自分の句
業を作り楽しみ野坂先生も
せよ誰れもせよ近く我書が出来
我国の俳句の

ぜと思ひ父母の家を分けて我家を
父母と共地祢の分なれば世家
天照大神の実と思ひ命の
用ひと長生き年と思ひ
農家の長と中心天命に
天の命の神ひを勤め一年
家を重ねの日ごとの

四方に巡りの法ぬ者代　愛人
初に敷に敷き眠りもと命ひ
いつもちまつ出はけ出ぬ者ぬ歳
歳ある人の名をけの名もちぬば
あるぬのしぬいぬ出ぬ男
御ほぬ法ぬ婦きその色
なんといとぬ中んといとぬ

坂田稼　藏

廿三

思兼神徳

愛角十人寄れば十人の知恵出る
打合合せ　お達の上人　寄
打解ひく出ぬ者角出

能登殿のその首をば又左衛門ちがひ給ふと
はと我が我さんしんを抜唯一おめ中山殿
他り出るの中を馬の焼角他分雄為
で他り出来ず中山殿我思ひを
抜く人の心中人の思ひを察し中山を
思ひ君の御の徳と中山殿思ひ君の徳
より岩も崩けや中山の中を焼我思ひ

を抜く人の思ひを汗ひ出すひ出すの
尚流の出の他り出る焼中間と
我人中残り出なく人の合出法師
唯一ち成中山和泉国を焼山殿中安
山殿も平成ち平一郎又後役
平上御平抜を

二月

義

日蓮上人法華の源を汲み玉ひ今身
法華経を弘め給ふ日蓮上人命に
海原や沖の小舟に揺られ
かなしき思ひ法の船
衆生命に
揺られ揺られ命法の船
揺られもてゆく者迷ふ人

天照大神は女神なれども天皇の孫子を
治めれども後の世の為を作法を始め
たまひ世は人を法に老幼の男女孫子
をもちゆるるより命行ふべ
松苗を植へたのむも月
我身の老を忘れ思ふの船
神より我を忘れ深き海原

[illegible]

[illegible]

[illegible]

惡敷子御授

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

申上候迄もなく出精専一大切と存候

年九月廿日

藏

東川
又七様

進級之儀御許の上慈悲の源なる父母
在職ら其恩を忘れ候はゞ[illegible]
[illegible]
[illegible]出精可被成候

来年之春は學問も大慶に存候
級の来り[illegible]己が心と[illegible]
[illegible]

別紙御文

古き
[illegible]の粽も[illegible]
進め[illegible]の[illegible]

浮世ぞと今ぞ我身の知られける
知り顔する人も浮世の人
浮世ぞと能く知れども知れぬ人
たぐひなきこの世の法の花
法恵上人を戒師とつくかたをもて
仏とおぼめ思ひ出で往生せぬ人
世中に居る　ものかに

一　中兵衛三方病気にて
打臥よりなれて友だちの
なれなれぞ涙なるる石涙
の病も重り中比と存じ
ながら一方
なる中兵の人のまゝに病ひ
中比の親角ずれの法者を
重くなやみと思ひ

疳之病

疳の虫整ひふとづれ出る事ふびん
我男ひを持ほ知の女出れとや事也
ヲヽ中ゆ〳〵ほ所を
人の病ひ重てや病ん意也よ
ひとの病ひ重くなるられを

ほ知ゝ〳〵ゆ〳〵ほ長意悪ゝ子の虫
叫ひ中ゝの病ひ重ゝほ長意悪ん
ゆ中ゝ病ひもゝ中ゝ中ゝ中ゝ又考ゝも
病人故今迄減ゝ中ゝ重ゝ中ゝ
所ゝゝゝ人病ゝ時ゝ中ゝ
中ゝ病ゝほ知ゝの女中ゝ
ほ動ゝ中ゝ中ゝ親ゝ中ゝ

十月廿八日に書面相達致拝見仕候
皆々様に御伝言仕候
国々御祈り
之慶不
已に此之年毎
無之ゆえ
御祈り
致呉候
一
国家
様に
中に
方に
病気
相
梅田
三郎
清に
遠国に
御祈り
の
御
祈
之慶
有
相成
皆々
様に
御祈り
の
中に
方に
病気
相成
候
に
付
御祈り
の
中に
方に
病気
相成
候
に
付
御祈り
の
中に
方に
病気
相成
候
に
付